

20日 土曜

創世記

11:1 さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった。

11:2 人々が東の方へ移動したとき、彼らはシンアルの地に平地を見つけて、そこに住んだ。
11:3 彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作って、よく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを、漆喰の代わりに瀝青を用いた。

11:4 彼らは言った。「さあ、われわれは自分たちのために、町と、頂が天に届く塔を建てて、名をあげよう。われわれが地の全面に散らされるといけないから。」

11:5 そのとき【主】は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

11:6 【主】は言われた。「見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない。」

11:7 さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」

11:8 【主】が彼らをそこから地の全面に散られたので、彼らはその町を建てるのをやめた。

11:9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで【主】が全地の話しことばを混乱させ、そこから【主】が人々を地の全面に散らされたからである。

シンアルに移住した人々は瀝青（れきせい－アスファルト）を発見し、新しい建築技術を手に入れました。そして人間の知恵は神をもしのぐと思い込んだのでしょう。天に届こうとまで考えました。



聖書の記述

その動機も問題で、「名をあげよう」という功名心また優越感、「散らされるといけない」という神への不信と不従順、そして「名を」あげれば「散らされ」ずに思い通りになるという力の論理などが見て取れます。主はそれを見過ごしにはできませんでした。

彼らがそれらの動機で傲慢な都市国家を作るなら、必ず他の民への脅威となり、争いが生まれるでしょう。バベルとは神なき人間の権力と繁栄の象徴なのです。神様は彼らがコミュニケーションできないようにされましたか、これは基本的に自己目的な人間の集合体では当然起こることです。

世界の国家・民族間では、危機感と優越感、また神なき不従順と力の論理で事が行われており、互いにコミュニケーションできないような不理解不一致が続いているですが、このバベルでの出来事にその本質があるのです。

そこに解決を与えたのがペンテコステの出来事です。聖霊によって、各国のことばで話し出し、福音があらゆる民に伝わったのです。

誰もがこのバベルのような心情に陥り易いものであり、またそのような問題を抱えるものです。聖霊によって、神様の目的のために1つになれるように、求めましょう。聖霊様を歓迎しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

